様式(細則 5-2)

令和 5年 2月 9日

浜田市議会議長
岩田 栄 様

議員名 牛尾 昭

調査研究活動報告書

下記のとおり調査研究のため視察等を行ったので、その結果を報告します。

記

1．期　間　令和 5年 2月 2日 ～ 2月 2日
pm 1:00～2:00

2．視察内容
有料老人ホーム地域創生のカギになるか?

3．視察先
スマート・シルバー協会。

4．調査経費　1000 円
(経費内訳　1000 円、— 円)

5．調査研究活動の概要
オンライン。

浜田市議会 受付 5.2.9

研修会先

スマート・テロワール協会。

表題：有機農業は、地方創生のカギとなるのか。

期間、令和５年２月２日、１９：００～２１：００

オンライン研修会。司会・進行：藻谷浩介氏。

弁士：久松達央、久松農園

１９９８年、茨城県の農業法人で研修。

１９９９年、独立、就農。５２歳。

水上勉の（土を食う日々）に影響を受けた。

＊現在、畑６ｈａ。露地物７０品目。労働力、社員２名、アルバイト４名。

売り先―個人９０％、サブスク型・詰合せ。

　　飲食店１０％

＊年商―５０００万円。

＊コンセプト：自分の食べたいものをお裾分け。

　　：自給自足への憧れ。

＊野菜の味の３原則（時間）（鮮度）（品目）作って売る―直販―あくまでも外でつくる。冬は冬らしく、夏は夏らしく。

家の畑の旬を届ける。ー組合せ野菜を１００人の他人に１回より１人の友人に１００回届ける。

＃「地方創生と農業」

＊どこの地域にも未来が有るわけではない。

＊２１００年の日本は、人口が３７００～６０００万人。

＊金も人もモノも日本には来なくなる。

＊国内の人間関係資本・自然資本への投資が不可欠。

＃二つの大状況。

市場の変容とテクノロジー、世帯人数の低下。

農業の産業化・集約化が加速している。

①全国の農家は９０％が年収５００万以下。

②食えない農家の淘汰。

③３０００～５０００万は増加傾向。

④農地はもっと減っていい。

＃農地のゾーニング

「極私的有機農業論」社会の中での機能とプレイヤーの動きは別。自分のものづくり―やりたいこと―与えられた環境―天地有機―生き物のからくり―ヒマワリ・トウモロコシは緑

肥―難しいから面白い。

弁士：千葉康信氏。４５歳。

３０歳で故山下一穂に師事し、２年間同居して学んだが、教科書に答えはないと言われた。

①土佐自然塾で研修。

②神奈川愛川町でスタートした。

③１年目で１５０万円―素人を実感する。

④畑は、１ｈａ以上必要、反収は５０万円。

＊土造り

土地の物理性、生物性、化学性を整えて作物が出来る環境をつくる。光のエネルギーが多様な生命と循環している。雑草を切って土に戻す（かややもみなどを）－緑肥―育てて土に戻す。農家は、１人、３００万円ないと生きていけないし２人だと５００万円ないとやっていけない。

現在、４，５ヘクタールで３０００万円売上、７人を使う。その他、公開セミナーなどを行う。例えば①有機圃場の現地見学会②有機農業の価値の理解③様々な農法の整理④官民連携の土造り⑤地域有機物の資源循環⑥地域性を活かした

技術の体系化⑦堆肥の質の向上―畜産農家との連携。

考察、

日本を代表する新進気鋭の若手農家、久松氏は、誰のために何をつくるのかわかっていて、適正規模の露地物農家で「極私的有機農業論」を掲げている。他方、千葉氏は、伝説の山下一穂氏に学び、時には、国のオーガニックヴィレッジ構想と連携したり、輸入に頼らない持続可能の農業を目指している。１００ｈａの田んぼで、米を作っても１億円しかならない現実を見ると、国民を養えるだけの水稲は必要。国が農業という生命産業をどうとらまえて、どう継続していこうとしているのか、瀬戸際を感じる。

以上、報告致します。牛尾昭。